

2015年度卒業論文紹介

その他のタイトル	Vorstellung einiger Diplomarbeiten 2015
著者	藤城 左和子, 内山 リサ, 西岡 葵
雑誌名	独逸文學
巻	61
ページ	231-237
発行年	2017-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/10878

2015年度卒業論文紹介

藤城 左和子

クライストによる散文の文体について — 副文の観点から —

クライストの文章は難解で複雑なものである。授業で読んだクライストの散文における複雑さに関心を持ったことと、ドイツ語の文法や構造に興味を持っていたことから、クライストの文章の複雑さを卒業論文のテーマとして扱うことにした。

西谷俊昭「構文的緊張とクライストの散文」(1971)¹では、クライストの文の特徴が以下のように述べられている。

彼の文を一瞥して明らかなのは、それが細かく切られ、箱入り文とでも表現すべき複雑な様相を持ち、また種々の挿入句でもって、まったく短かな小片に分割せられているという事実である。(58ページ)

このことからクライストの文章は、挿入句が主文の情報の流れを遮ることで文章が複雑になっていると想定できる。クライストの文章に特徴的な箱入り構造とは、副文が主文に組み込まれ、その副文の中に更に副文が組み込まれたものである。そのため、箱入り構造を作り出している副文に着目し、クライストの文章の複雑さを検討した。

本論では、副文が文を複雑にする要因の一つであると考え、本文中の副文の種類と、主文に対する位置を分類し考察する。副文は接続詞文・関係文・間接疑問文の3種類に分類し、zu不定詞句と分詞句も副文相

1 西谷俊昭「構文的緊張とクライストの散文」、関西学院大学人文学会『人文論究』、第21(1)号、1971年、56-74ページ

当の役割があるとして、副文同様に集計する。更に、副文が主文の流れを遮るものであるかを検討するため、副文の主文に対する位置が前・中・後のどこであるかを統計的に分析した。同格や冠飾句も主文に組み込まれ流れを遮るものとして、分類項目に加えた。

以上の準備的考察を踏まえて、次のように仮定した。

- 副文の数は多い
- 副文が主文の中に組み込まれている場合が多い
- 中置される副文としては、文中の語句に従属する関係文が多いと考えられるため、副文の種類は関係文が最も多い

この仮定に基づき、クライストの4つの作品を調査し、文章の種類によって違いがあるかを比較した。対象とした作品は、物語文である『決闘』（Der Zweikampf）と政治評論『ザクセン王のドレスデンからの出立について』（Über die Abreise des Königs von Sachsen aus Dresden）、の一部、手紙『1. アウグステ・ヘレーネ・フォン・マソ宛』（I. An Auguste Helene von Massow）の全文、そして喜劇『こわれがめ』（Der zerbrochne Krug）の第一幕である。

集計した結果は次の通りである。

【表1 副文の種類とその合計数】

		決闘	政治評論	手紙	こわれがめ
副文	接続詞文	43	60	38	14
	関係文	43	37	29	17
	間接疑問文	1	4	5	2
句	zu 不定詞句	26	51	31	2
	分詞句	7	0	2	1
その他		12	3	2	1

【表2 副文の主文に対する位置】

	決闘	政治評論	手紙	こわれがめ
前	8	8	13	3
中	59	61	22	6
後	53	83	70	26

表1の結果から、決闘と政治評論では副文が多く使われていることが分かる。政治評論では他のテキストと比べ zu 不定詞句の使用が目立つ。関係文の数は、『決闘』のみが他の要素に比べ、接続詞文と並んで最も多く、残りの3つの文章では接続詞文、zu 不定詞句のほうが多い。更に『決闘』では分詞句やその他の冠飾句などが、他の作品より多く含まれている。

表2から、決闘のみで主文に副文が組み込まれている形が多いことが分かる。分析の結果、『決闘』では、副文に副文が従属するものも、他のテキストに比べ多いことが分かった。このことから物語文である『決闘』は、多様な表現手段が万遍なく使われることで文章が作りこまれ、その結果文章が複雑になっているということがわかる。

内山 リサ

ルター聖書における形態論的考察

— 名詞を中心にして —

0. はじめに

本論ではルター訳聖書（1545年）のうち、ルカによる福音書を用いて、名詞を形態論的に考察し、現代ドイツ語との差異を明らかにする。

1. 弱変化名詞について

弱変化名詞は、新高ドイツ語（Nhd.）においては数が限られているが、中高ドイツ語（Mhd.）の時代には男性名詞、女性名詞ともに数は多く、初期新高ドイツ語（Frnhd.）時代を経て多くが強変化に移行した。Nhd. では男性弱変化名詞は多く残っている。ルターにおいて弱変化している

名詞として Mensch, Herr, Wille, Name が挙げられる (例: Er ist gleich einem Menschen / der ein Haus bawete (6,48))。また、Frnhd. 時代には、男性弱変化名詞が強変化に移行する傾向として、Herrens, menschens のように 2 格の語尾に-(e)ns をつける試みがあるが、本論で扱うルター聖書に-(e)ns という 2 格語尾は見られなかった。

男性弱変化名詞には Garten のように、語末の-(e)n を単数 1 格につけることによって強変化へ移行していったものもある。der Samen、der Frieden もこのタイプであるが、前者に関してルターでは Same (単数 1 格) と Samen (単数 3、4 格) が見られ、まだ弱変化であることが窺われる。他方、der Frieden に相当する語として Friede (単数 1 格)、Friedes (単数 2 格)、Friede (n) (単数 3 格)、Friede (単数 4 格) があり、Friede を 1 格とする強変化名詞のような様相を呈している。Mhd. において Friede は ja-Stämme という母音的格変化に当たる名詞で、本来強変化名詞である。従ってルターにおける Friede は弱変化とは言えない。H. Paul の Deutsches Wörterbuch や J. Grimm / W. Grimm の Deutsches Wörterbuch によると、Friede ははじめ強変化であったが、徐々に弱変化していき、最終的には 1 格も n を伴い、強変化に移行した。

ルター聖書において弱変化の特徴が見られる女性名詞として Schule、Strasse、Seele、Erde が挙げられる。Schule は in der Schule と in der Schulen が混在しており、弱変化から強変化へ移行する途上であることがわかる。Strasse には von (in) der strassen という弱変化の例が見られる。Seele に関しては zu meiner Seelen と von ganzer seele に見られるように、強変化と弱変化が混在している。Erde は auff Erden という形でよく用いられ、弱変化単数 3 格形と解釈されている。他方 Himmel vnd Erden vergehen という表現があるが、グリムのドイツ語辞典ではこの Erden は単数 1 格形と解釈されており、Frnhd. では強変化的に使われていたらしい。

聖書コンコーダンスによると、Mhd. にあった中性弱変化名詞 Herz、Auge、Ohr、Wange のうち Wange は旧約聖書にしかないので、他の 3 つの語彙に関して全新約聖書に資料を広げて考察した。Herz は Nhd. への過渡的特徴を示している。Auge は強変化へ移りつつある。Ohr は単数 1、4 格形は ohr (e) で、単数 2、3 格の例はなかった。

2. 格変化について

ルター聖書には *dem Berge*, *dem Felde* のように、男性・中性単数 3 格に語尾 *-e* を持つ語形が多数見られる。これらは *Hause* など一部を除いて *Nhd.* では失われる語尾である。

3. 複数形について

語尾に *-er* を持つ複数形は *Frnhd.* 時代に増加していった。現代語において *Wort* には 2 つの複数形があり、*Wörter* はまとまりのない語彙の集まりを指し、*Worte* はまとまりのある意味を持つ場合に使われる。ルターでは「神の言葉」「イエス・キリストの言葉」といった表現で *Worte* が多用されている。本来中性名詞の特徴であった *-er* 型複数形は時代とともに男性名詞にも波及していく。ルター聖書においては *Ort* の複数形として *Ort*, *Orter*, *örten* が併存している。*Geist* に関しては *Geiste* と *Geister* が併存している。他方 *Kind* と *Weib* は完全に *-er* 型複数形 (*Kinder*, *Weiber*) に移行している。

Tag のような *a-Stämme* の男性名詞は *-e* 型複数形を持つ。このタイプでルター聖書によく現れるものとして *Knecht* と *Feind* がある。両者とも複数形は比較的安定して語尾 *-e* を示している。

4. まとめ

Frnhd. は *Mhd.* から *Nhd.* にかけての過渡期の言語である。この時期に位置するルターのドイツ語がどのような姿をしているのか、今回の考察で垣間見ることができた。特に弱変化名詞の考察において、*Frnhd.* における *Friede* が *Nhd.* とは異なる語形変化を持っており、それが現代の語形変化に至るまでの過程を自分の目で確認できたことは、言語学に対するさらなる興味を筆者に持たせてくれた。

本論では名詞を中心に考察したが、ルター聖書には過去分詞に *ge-* がつかないものがわずかながら現れる (たとえば *ルカ* 4, 34 : *Du bist kommen*)。動詞の考察も並行してできれば、この研究に広い視野を与えることができたのではないかと少し悔やまれる。

ルターが *Mhd.* の特徴を残しつつも、読者に理解されやすいドイツ語を目指した様子が目に浮かぶような研究であった。しかし、同じページ

の中で不明瞭で揺れのある語形変化に出くわしたときは、大いに困らされた。これもルターが過渡期にあることを示しているのであろう。ドイツ語がいかに合理的な言語であるかということ、ドイツ語を学ぶものには邪魔に感じる格変化も、実際は文の構成になくはならない大きな要素だということを改めて学ぶことができた大変意義のある考察であった。

西岡 葵

ドイツにおける歴史的景観と観光の関わりについて

ドイツには中世の姿を残す歴史的景観を有する街並みが多数存在している。このような街並みが残る地区は旧市街地と呼ばれ、現在もなお人々の生活の中心の場となっている。第二次世界大戦の際に多くの都市が破壊されたドイツであるが、戦後多くの都市でこうした歴史的な街並みが再建されたのにはどのような背景があったのかについて考察した。

本稿では、「ドイツ人の景観に対する価値観」と「法律」という二つの側面から、ドイツの歴史的景観の再生について論じている。その結果、ドイツにおける旧市街の歴史的景観の復旧が戦後すぐに始められたものではなく、1970年前後になって進められたものであったということがわかった。旧西ドイツにおいては、経済成長、開発、自動車交通の増大などによって悪化した住環境に対して反省の聲が挙がり、また戦後の住宅不足が解消されると建造物の造形的魅力の欠如や単調性が批判されるようになったのが1970年代であった。1975年のヨーロッパ記念物保護年もまた、歴史的景観や遺産の保護に関心が集まるきっかけとなった。このような社会的動きの中で、旧西ドイツの9つの州で新たに都市景観に関する法律が成立した。

また、現在に至るまで保存されてきたドイツの歴史的景観は、ドイツの観光とも関わりを持つものであるということが考えられる。ドイツの観光産業に関する概要や、ドイツ連邦政府の観光政策等においても考察を加えた。ドイツにおける国際観光客到着数は3300万人（2014年）を数えており、年々増加する傾向にある。

特に、ドイツの観光マネジメントでドイツ観光局が果たしている役割

は大きい。ドイツ観光局は、世界規模で広報活動やマーケティングを行い、そのうえで様々なキャンペーン、セールス活動を通じて、訪独旅行者の増加やドイツの観光経済政策に貢献している。

次に、歴史的景観の保護と観光が連動し合っている例として、本稿ではロマンティック街道を取り上げている。ドイツ観光の定番として現在では有名となったロマンティック街道だが、観光化の裏側では街道沿いの街々がそれぞれに課題を抱えていた。これらの街に共通しているのは、中世の街を現代と如何に適合させていくかということである。旧市街地の保護や観光化が進む一方で、建物の老朽化や生活環境の変化に合わせた街づくりが求められている。これには住民と行政双方の協力、理解、意識が大切となる。

歴史的景観を売りにした観光は、ロマンティック街道のみならず、ドイツ各地で州や自治体によって進められている。それは戦後旧西ドイツとは異なった発展を遂げてきた旧東ドイツの都市や、またはバルト海周辺の新興リゾート地域などにおいても同様に見られる傾向である。街並みの継承と共存には少なからず問題点も生じる。しかしそれにもかかわらず、ドイツの各都市が歴史的景観を維持してきたという背景には、ドイツ人が自分たちの過去を受け止め後世に残そうとする意識が現われているのではないかと思われる。

暮らしに多少の不便があるとしても、住民たちが伝統的な建造物や街の景観自体を文化として捉え、保存し、自分たちが生活していく場としても機能するようにつくりあげているのは、この意識があってこそである。ドイツが有している歴史的景観は、ドイツの人々の自らの手によって形成され守られてきたものであり、ドイツ文化の一端を担っているということが出来る。

景観は単なる見た目の問題だけではなく、その地域の人々の暮らしを考えることにも繋がる。観光においても、その地域が持つ固有の形態に対して人々は価値を見出すのであり、その形態を維持するにあたって地域住民の存在を無視することはやはり出来ない。ドイツにおいては歴史的景観が独自性を持つ観光資源として機能している地域も多く、景観と観光は、共に住民の暮らしと深く関わりを持つものである。

